

話し合いの相互視聴によるメタ認知の育成 —テレビ会議システムを活用した話し合い学習の試み—

黒田麻衣子*

本実践は、オンライン授業における話し合い学習の方法と成果についての報告である。本稿は、話し合いの様子を録画視聴することによる学習効果について論じることを目的とした。その結果、自分たちの話し合いを再視聴するという活動や、他グループの話し合いを視聴して感想を述べ合うという活動により、自分たちの「話す態度」「聴く態度」をメタ認知できることが明らかになった。オンライン授業、タブレット端末を利用した話し合い学習の学習効果が示唆された。

[キーワード：話し合い、メタ認知、オンライン学習、情報コミュニケーション]

1. はじめに

2020年2月27日、コロナウィルス対策として全国の小中高校に臨時の休校要請が下された。これにより、多くの小中高校が突然のしかも長期に及ぶ臨時休校に追い込まれた。筆者の在住する徳島県においても、すべての公立校が3月から臨時休校に入り、5月中旬まで続いた。筆者自身も、2月当時勤めていた高校で教えていた生徒たちとは、別れの言葉も交わさぬまま二度と会えなくなってしまった。授業は中途半端に終わりを迎え、定期試験もできないままに空しく成績処理だけを終わらせた。せめて経営する国語塾だけは学びを止めまいと、3月からオンライン授業に切り替えた。

コロナウィルスの猛威は、依然として予断を許さない状況にあり、再開した学校教育もいつまた登校停止になるか分からない。第一波の長期休校時にオンライン学習を行うことができた学校の割合は、高所得先進国が9割を超えるなか、我が国の小学校ではわずか8%、中学校でも1割程度という残念な結果であった。デジタルデバイドは、情報社会において児童生徒の学びの機会損失に繋がることが露呈したと言える。この反省を踏まえ、現在GIGAスクール構想の前倒しにより、全国の小中学校には1人1台のタブレット端末整備が急ピッチで進んでいる。高等学校については、今回、公費によるタブレット端末導入は国の補助金対象外であるが、生徒の発達段階やスマートフォン所有率の現状からBYOD(Bring Your Own Device)を基本とした教育のICT化が目指

されている。次の一斉休校の際には、日本でも多くの学校でオンライン授業が行えることであろう。

ただ、オンライン授業では、指導者からの講義を届けることはできるものの、学習者達の主体的で対話的な活動をどのように担保するかが課題のひとつとなっている。

2. 本研究の目的

本実践は、オンライン授業における話し合い学習の方法と成果についての報告である。本稿は、ディスカッションの様子を録画視聴することによる学習効果について論じることを目的とする。

私塾における実践ではあるが、オンライン授業、タブレット端末を利用した授業実践の事例として、学校教育現場にも参考になるものと考えている。

3. 実践の概要

本研究では、T県在住の高校1年生10名、中学3年生2名の合計12名を対象に、テレビ会議システムを用いて、オンラインディスカッションを行い、その様子を録画して相互視聴させた。学習活動は、2020年5月上旬に、ディスカッション1コマ(90分)と振り返りタイム1コマ分(約90分)の計2コマで行った。

3.1 使用したアプリケーション

アプリケーションは、Microsoft社のオンライン会議ツールであるSkypeを使用した。Google Classroomは、私塾であるため使うことができない。Microsoft社のTeamsは、Office365のサブスクリプション契約をしていない学習者もいたため使用できなかった。私立校を中心に、3~5月の休校中にオン

* 鳴門教育大学、兵庫教育大学大学院連合 学校教育学研究所(博士課程) 教科教育実践学専攻 言語系教育連合講座

ライン授業を実施できた学校現場では Zoom を利用することが多かったと聞いているが、今回の実践では Zoom よりも Skype の方が使い勝手が良いと判断した。たしかに Zoom は、ブレイクアウトルームというグループ学習機能を持っており、一斉授業とグループ学習を自在に行き来できる点において、優れている。Skype でのグループ学習は、一斉授業のグループチャットと別にグループ学習のためのグループチャットを新たに立てねばならず、学習者達も一斉授業グループチャットを抜けてグループ学習用のチャットに入り直さねばならない。それでも Skype を使ったのは、Skype のグループチャットには、Zoom にはない、次のような利点があったからである。

- ①Skype のグループチャットは、オンライン会議を終えたあともチャット履歴が学習者それぞれのデバイスに残ること。Zoom はオンライン会議システムに特化したアプリケーションであるため、会議終了とともにチャット履歴は消えてしまう。
- ②Skype も Zoom も、ボタンひとつで会議を録画することができるが、録画した記録映像を共有する際に、Zoom は映像をいったんデバイスに保存し、それを共有するための作業を必要とする。その点 Skype は、録画した映像が自動的にグループチャットに共有されるので、会議開始時に録画ボタンをクリックするだけでよい。
- ③Skype で録画してグループ内に共有した映像は、あとからグループに参加したメンバーも視聴することができる。ちなみに同じ Microsoft 社の Teams は、録画時に参加していたメンバーしか映像視聴できず、Zoom は他のアプリケーションでの共有を必要とする。

以上のことから、①学習者の手間がもっとも少なく、②グループ学習の事後指導が容易で、③グループ学習映像の塾生以外への流出のリスクが最小のアプリケーションとして、Skype を選択した。なお、いずれも学習活動を行った 5 月当時の状況である。現在は、機能が改善されているアプリケーションもある。

3.2 指導の方法

まず一斉授業（オンライン）において、グループ学習によるディスカッションをする旨をアナウンスした。題材として、当時世間を賑わせていた「9 月入学・始業」の是非を話し合ってみようとなし、30 分間の事前学習時間を与えて、時間になったら配属されたグループチャットに入り、ディスカッションを開始するよう指示した。

学習者が事前学習をしている間に、3～4 人のグ

ループを組み、グループチャットには次のような書き込みをした。「討論タイムは 19 時までの 20 分間です。グループ全員が揃ったら、録画ボタンを押して話し合いを始めてください。9 月始業に賛成の人、反対の人に分かれてグループ討議をしてもいいし、賛成か反対かどちらかの立場に立って、意見を集約してもいいです。話し合いも、回を重ねることでだんだんと上手になっていきます。最初はヘタでもいいから、積極的に話すことを心がけましょう。あとで、あなたたちの話し合いを聞けるのを楽しみにしています。どうしてもやり方がわからなかったり、時間を持て余してしまったりして、困ったら、メッセージを入れてください。ヘルプに入ります。」

学習者たちは、30 分の情報収集タイムのあと、各々のグループチャットに参加し、20 分間の自由ディスカッションをした。ディスカッションを終えたあと、学習者全員を再度、一斉グループチャットに集め、事後指導として次のような指示をした。

- ①先ほど録画した自分たちのグループディスカッションを視聴し、その感想をグループチャットに書き込むこと。
- ②すべての学習者が自分たちのグループディスカッションの感想を書き終えたら、それぞれのグループに他のグループのメンバー全員を招待するので、他グループのディスカッション録画を視聴して、自分たちのディスカッションと比較し、感想をチャットに書き込むこと。

ここまでの指示で、全体オンライン授業を終えた。学習者たちには①までが本日の授業であると伝えておいた（ディスカッション 1 コマ 90 分担当）。また、次の授業までに②を終えるように指示をした（振り返りタイムみなし 1 コマ 90 分担当・随時）。

3.3 成果

12 名中 10 名は、高校に入学をしてから一度も登校できていない学習者たちである。中・高ともに長期休校中であり、外出も控えている状態であったので、友人と会う機会も長く持てていない学習者たちにとって、グループディスカッションは楽しい学習活動であったようだ。

これまでの対面授業における話し合い学習でも、事後には必ずその場で感想や反省、気づきを書かせてきた。そこには、当該話し合い学習の内容面に対する記載のほかに、話し合いそのものへの反省や感想が書かれていることが多かった。このうちの後者に目を向けてみると、対面での話し合い学習における記載には、自分とは違った意見を聞くことでの視野の広がりや対話による思考の深まりを気づきとし

て指摘しているものが多く見受けられ、これらが「話し合い学習の成果」の主な内容であった。今回、話し合い学習の後に「自らの話し合いの様子を視聴する」「別のグループの話し合いの様子を視聴して感想を述べ合う」という新たな学習を取り入れたことによって、対面の話し合い学習からは出て来なかった気づきが散見された。

以下、話し合いの様子を録画視聴した学習者の感想・反省・気づきをいくつか抜粋する(表1)。

4. 実践の分析

上山(2013)は、メタ認知を促す学習指導に関する先行研究をレビューし、「話し合い学習においては、実際に話し合う活動を行うだけでなく、事後に話し合いを対象化する活動を取り入れることが有効である。」と結論づけている。話し合いを対象化する活動としては、事後に感想や気づきを書かせるという方法がよく取られており、筆者の教室でも話し合い学習の事後には必ず行う学習活動である。

「自グループの録画視聴の感想」には、対面授業における話し合いの振り返り学習と同様の気づきが散見された。対面学習での話し合いにおいても、事後感想として「自分の意見の再表明」や「他者意見への批判・再評価」を書き記す学習者は多く、話し合いを振り返りながら、あらためて議題について思考していることが見受けられる。今回の「自グループの録画視聴」を経た感想にも、Aには「他者意見への批判・再評価」が記されており、ほとんどの学習者が「自分の意見の再表明」をしている。こうしたメタ認知は、録画視聴をせずとも、話し合いという学習活動のあとに振り返る時間を取れば可能である。

だが、Bを記した学習者イは、このあとに口頭で「自分的にはすごく積極的に話し合いに参加していたつもりだったけれど、録画を見ると全然話せていなかった」と感想を述べてくれた。また、Cの「二回同じようなことをした」という感想は、内容的に同じような話し合いを繰り返してしまったという反省であり、自分たちの話し合いの様子を客観視したことで生まれた気づきである。BやCの感想は、録画視聴したからこそ獲得できたメタ認知である。自分を客観視したことで、Cの「二回目は反対の意見の人に質問!みたいな感じでしたらより深められた」という感想のような、次回への課題や改善策の提示も多く見られた。

特筆すべきは、やはり他グループの話し合いを録画視聴したことによる課題発見と学びである。グループ壺の話し合い学習では、途中で全員が沈黙し

てしまう時間があり、表1に掲載していない学習者の感想にも「話し合いを続けていくことが難しかった」、「もっと積極的に話し合いができるようにしていきたい」といった反省が記されていた。学習者アの記した感想G・Mや学習者イの感想Hには、自分たちの話し合いへの問題意識をもって他グループの話し合いの様子を視聴し、解決策を模索しようとした軌跡がうかがえる。自分たちの話し合いの様子を録画視聴したあとに、他グループの話し合いを録画視聴したことによって、グループ壺の学習者たちは「話し合いをスムーズに進めていく方法」や「話し合いの雰囲気づくりの方法」を学んでいる。また、「録画を見ると全然話せていなかった」と感想を述べた学習者イは、他グループ話し合いを視聴して、N「私は頷きは出来ていたけど、拍手は出来なかったので見習いたい」とも記している。たとえ積極的に発言できなかったとしても、頷いたり拍手をしたりすることで、話し合いに積極的に参加することができるということを学んでいる。自分の学習活動の態度を客観的に視聴し、それを他者と比較したことで生まれた学びであった。

誰かの発言に対して、頷きや表情の変化などで適切なリアクションを取ることは、とくにオンラインの話し合いにおいては重要である。オンラインでは、互いの空気感が伝わりづらいため、話し合いの雰囲気づくりには多少大仰なくらいのリアクションが求められる。オンライン話し合いでは、常に自分の姿も画面上に映し出されるため、もともとこうした「オンライン話し合いにおけるマナー」をメタ認知しやすいという側面はあるだろう。だが、オンラインの話し合いに慣れておらず、話し合いのスキルも成熟していない学習者たちにとっては、話し合いに参加しながら自らの参加態度をメタ認知することは難しかったに違いない。この点において、自分の話し合う姿を録画視聴で客観視し、他グループの話し合いの様子を視聴したことによって、自分自身の態度を内省でき、メタ認知を働かせることができた。「自分で考えつくり出した情報は、単に他者から与えられた情報よりも記憶に残りやすい」と三宮(2018)も述べており、高い学習効果とその持続性が期待できる。実際に、この学習のあと、オンライン授業中であっても画面越しに頷いたり微笑んだりというリアクションを取る学習者が増えた。

「二回同じようなことをした」と自グループの反省を記した学習者ウは、他グループの録画視聴から、I「結論に対しても難点を改善するために話し合いを深めていっているのも参考にしたい」とか、O「自分たちの主観だけで話し合いを進めるのではなく、途

中で調べた事実を交えながら話し合いをしているところを見習いたいと思った」といった感想を記しており、「話し合いを深める方法論」を学んでいる様子が見え、グループ参の学習者の感想にも、学習者ウと同様の気づきが見受けられる。K「話し合いの構成で、意見を言うときと反論するときとが

表1 白グループおよび他グループの話し合いを録画視聴した学習者の感想

	白グループの録画視聴の感想	他グループ(1)の録画視聴の感想	他グループ(2)の録画視聴の感想
学習者A グループ吉	A)話し合い、勉強になりました。最初の〇〇君の意見に対しては、このまま延長していた方が差が出てしまうのではないかと考えていました！ 結果、オンライン授業をすべきだという考えになり、納得することができ良かったです。	G)意見が3対1に分かれていたけれど、一人一人の意見がしっかりあったことで、話し合いがスムーズに進むことがわかりました！ また、雰囲気も良くこのような雰囲気私にも作れるようにしようと思います！	M)感想として勉強、行事、生徒についてなど様々な観点から話し合っていて興味深かったです！ また、相手の意見を肯定してから自分の反対意見を言うことや、誰かが話し終わったら拍手をすることで互いに気持ちよく話が進められることを学びました！参考にさせてもらおうと思います！
学習者イ グループ吉	B)色々な意見が出てきて面白いなと思いました。私は、あまり話すことは出来なかったかもしれませんが、自分の意見を自分的には頑張ったと思います。 自分の意見を人に伝えるのは難しいけど、伝えあうというのは大切なことだと実感しました。	H)皆が話し合いに積極的に参加していて、とても良い雰囲気でした。そういう雰囲気を作ることはすごく良いことだと思います。私も見習いたいです。	N)私は顔きはできていたけれど、拍手はできていなかったのを見習いたいです。 たくさんの素晴らしい意見が出ていてすごいと思いました。
学習者ウ グループ武	C)4月9月どちらにもいい意見があって、自分の意見を最終的に決めるのが難しかったです。文化とか学習の面のどちらを重視するかで意見が変わってくるのかなと思いました。 話し合いでは二回同じようなことをしたから、二回目は反対意見の人に質問！みたいな感じであればより深められたのかなあと感じました。	I)この議題では全員が一致して結論を出すのが難しいと思っていたけれど、オンライン授業をするという新たな視点を見出して全員が納得できていたのがとてもいいと感じました。 また、その結論に対しても難点を改善するために話し合いを深めていっているのも参考にしたいと思いました。	O)私たちのグループは、4人が順番に意見を言うという形をとっていたけれど、このグループのように口々に意見を言って深めているのが魅力的でした。また、自分たちの主観だけで話し合いを進めるのではなく、途中で調べた事実を交えながら話し合いをしているところを見習いたいです。
学習者エ グループ武	D)私もそう思います。理由は4月も10月どちらも利点と欠点があり、今回の話し合いだけでは決めることは難しいと思います、自分なりにより深く考えようと思ったからです。あらゆる視点からの意見をきいて良かったです。	J)私はこの議題で最後に結論を出すのは難しいと思っていましたが、新しい意見も聞けてなるほどな、と思いました。私は学生の視点で主に考えていましたが、経済や社会の仕組みなどの観点からも考察しないとイケないなと思いました。意見を聞く中で自分の疑問や新たな課題がより明確になったと思います。	P)留学や世界のことに触れて話し合いを行っていて、とても良いと思いました。また、話し合いに全員が積極的に参加していて、話し合いに参加しやすい雰囲気、私も見習いたいです。
学習者オ グループ参	E)いろいろな意見が出ましたが私はやっぱり9月始まりが良いと思いました。しかし、学年がぐちゃぐちゃになるという意見を聞いて、それはまた考え深いものだと思います。とても有意義な時間を過ごせたと感じます。	K)一人一人が丁寧に自分の意見を言っているのが素晴らしいなと思いました。また高校生活だけでなく、日本の文化についても話し合っており私もその点について考えたいと思いました。話し合いの構成で、意見を言うときと反論するときとがはっきり分かれていたので話がごちゃごちゃにならずメリハリがついていたという点は私もこれから真似したいと思いました。	Q)話し合いのまとめを言うことはとても良いことだと思います。経済や生活など色々な話をしており、とてもおもしろかったです。 それぞれの意見をよく聞き、その意見一つ一つの話ができていたのすごいいいと思いました。人の意見を聞き、すぐに考えて自分の意見が出せるのはすごいと思ったし、真似したいと思いました。
学習者カ グループ参	F)今日の話し合いで、9月スタートと4月スタートのどちらにもメリットがあるということがわかりました。私も9月スタートの方がいいと思います。しかし、これまで長く4月スタートで来ていたので、習慣づいていたものがいきなり変わり、戸惑うこともあるのではとも思いました。とてもたくさんの考え方を聞くことが出来て楽しかったです。	L)日本の習慣について考えていなかったの新しい意見を聞いて良かったです。反対意見にもしっかり耳を傾けてうなづいたり拍手をしたり自分の意見に取り入れられたりしてすごいいいと思いました。参考にになりました。	R)個人の立場を明確にさせて話し合いを行っていてとても良いと思いました。また、ほかの人の意見に賛同したり、疑問を投げかけることによって話し合いをより深く進めることができてすごいいいと思いました。最後のまとめも全員の意見を反映させていてとても良いと思いました。たくさん勉強になりました。

(表中の文章は学習者の記述を尊重して、誤字脱字や文法のミスもそのまま転記している。)

はっきり分かれていたので話がごちゃごちゃにならずメリハリがついていた」、R「個人の立場を明確にさせて話し合いを行ってとても良いと思った」という感想からは、グループ参の学習者たちにとっては自分たちのグループの話し合いが整理されたものではなかったという反省が透けて見える。

感想KとOは、どちらも話し合いの構成に着眼し、どうすれば話し合いが深まったのかを自分たちのグループの話し合いと対照させながら考察している。グループ参の学習者ウは、グループ参の話し合いを視聴してO「私たちのグループは、4人が順番に意見を言うという形をとっていたけれど、このグループのように口々に意見を言って深めているのが魅力的だった」と述べ、逆にグループ参の学習者オはK「一人一人が丁寧に自分の意見を言っているのが素晴らしいと思った」と述べている。互いのグループの良さを認め合い、自分たちのグループの話し合いを批判的に考察しているところが面白い。他グループの話し合いの様子を視聴したことによって、自分たちの話し合いをメタ認知できたとともに、様々な話し合いのスタイルを獲得したものと考えられる。

感想J「私はこの議題で最後に結論を出すのは難しいと思っていた」からは、他グループの話し合いを録画視聴している過程で自らの思考をメタ認知し、整理していることが推察される。自グループの録画視聴の段階では、多くの学習者があらためて自分の意見を書き記していたのだが、他グループの録画視聴の際には、自己の意見の再表明をした学習者は半数以下に減少した。一方で、P「留学や世界のことに触れて話し合いを行っていて、とても良いと思った」や、J「私は学生の視点で主に考えていたが、経済や社会の仕組みなどの観点からも考察しないといけないと思った」、L「日本の習慣について考えられていなかった」などのように、自分たちの話し合いには出て来なかった観点についての記述が多く見られ、他グループの話し合いを録画視聴したことで議題に対する複眼的な視点を獲得したことがうかがえた。また、Iは、議題の難しさを指摘したうえで「新たな視点を出す」という止揚の視点をこの話し合い視聴から学び、「その結論に対しても難点を改善するために話し合いを深めていっている」という話し合いの内容に対する鋭い分析と考察を見せている。山元(2003)は、お互いの発言に学ぶという相互作用の中でつかみ取っていった知識は、一斉授業での教師の誘導と説明によって授けられる知識とは異なる、体験をくぐった知識として主体的に獲得されたものと言えるとし、「それは印象深いエピソード記憶として学習者の中に残っていくのではないか」と述べ

ている。主体的に獲得された知識は、人から授けられたものに比べて圧倒的に記憶に残りやすいことは、Slamecka & Graf(1978)によって明らかにされている。感想Iに見られるような発見と学びは、まさにSlamecka & Graf(1978)の言う自己生成効果(self-generation effect)であり、学習内容についての精緻化が行われていると言えるであろう。

5. 考察

一人一台のタブレット導入により、学校教育は一斉授業の形態から、個別最適化された学習形態への変革を迫られている。学校教育は知識を授けるだけの場ではなく、学習者が主体的に問題を発見し解決する場なくてはならない。指導者はそのための適切な環境を整え、学習者の学びを支援する人にならねばならない。学習者の学びを一から十までコントロールするような、行き過ぎた管理は学習者の主体性を奪う。主体的・対話的な学びが実現する「適切な環境」をどうデザインするかが、指導者の力量となる。とくに、話し合い学習においては、指導者による環境づくり・カリキュラム設定が重要となる。

森(2013)は、「日常生活における偶発的な機会では習得できない力であるからこそ、『話すこと・聞くこと』の学習は準備された環境とカリキュラムの下で実践される必要がある。」と述べ、「そのための研究がこの領域における今後の課題である」と結んでいる。適切な環境とカリキュラムを準備し、学習者自身の発見による学びをデザインするためには、まず〈適切な環境があれば、学習者自身が誰の手も借りずに習得できる力〉と〈習得するためには、指導者による適切な助言・支援が必要な力〉を分類整理しておく必要があるだろう。

今回、ディスカッションの様子を録画視聴させるという「話し合いを対象化する学習活動」を行い、その学習効果を報告した。指導者の助言がまったく無い状態で学習者にどのようなメタ認知が起こったのかを整理し、〈適切な環境があれば、学習者自身が誰の手も借りずに習得できる力〉を明らかにできたことは、今後の話し合い学習をデザインしていく上で大きな手がかりになると考えている。

6. おわりに

今年のコロナ禍によって、多くの企業が在宅ワークを取り入れ、オンライン会議や研修会が当たり前の世の中になった。テレビ会議システムによる会議や研修は、今後も継続的に利用されることであろう。テレビ会議システムにおけるコミュニケーション力は、これからの社会において必要不可欠なコンピテ

ンシーの一つとなる。今後は、こうした視座からもオンラインによる学習指導の研究を深めていきたい。

参考文献

上山伸幸(2013)「話し合う力を育てる学習指導方法の検討—話し合いを対象化する活動を中心に—」, 『全国大学国語教育学会発表要旨集』, 125, pp.119-122

三宮真智子(1995)「教授・学習を支えるコミュニケーション・メディアの研究をめぐって—わかりやすく, 興味深く, 覚えやすい表現の追求—」, 『教育心理学年報』, 34, pp.85-93

三宮真智子(2018)『メタ認知で〈学ぶ力〉を高める認知心理学が解き明かす効果的学習法』, 北大路書房

森美智代(2013)「話すこと・聞くことの学習指導に関する研究の概観と展望」, 『国語科教育学研究の成果と展望Ⅱ』, 全国大学国語教育学会編学芸図書, pp.55-60

山元悦子(2003)「話し合う力を育てる学習指導の研究—メタ認知の活性化を図る手立てを通して—」, 『国語科教育』, 54, pp.51-58

Slamecka, N. J., & Graf, P. (1978) The generation effect: Delineation of a phenomenon, *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, 4(6), pp.592-604

*本稿は、2020年10月31日、11月1日開催の「全国大学国語教育学会」にて自由研究として紙面発表した内容をもとに、加筆したものである。